



大妻多摩中学校

二〇二二（令和3）年度

入学試験問題（第二回）

【国語】

時間 50分

2月2日（火）

【注意事項】 1 問題は17ページまであります。

2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

田口幹人『まちの本屋 知を編
み、血を継ぎ、地を耕す』
〔ポプラ社〕より

本文が入ります。

問1 — 線部①の空欄に平仮名四字の言葉を入れて、「人間の一生」の意味を表わす慣用表現を完成させなさい。

問2 — 線部②「近づきすぎないようにする」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から

一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 客の個人的な情報を知らないようにする、ということ。

イ 本の情報をなるべく知らないようにする、ということ。

ウ 客が本を選ぶ時に近くにいないようにする、ということ。

エ 客に本を不必要に押しつけないようにする、ということ。

問3 — 線部③「動きが鈍くても」を具体的に言い換えるとなりですか。《○○○○ても》の形で答えなさい。

問4 ④ に漢字一字を当てはめなさい。

問5 — 線部⑤「本の面構えがいい」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、

その記号を答えなさい。

ア 本の装丁（外見）と内容とが実にうまく合っていることが分かる、ということ。

イ 手間をかけてでも売ってみたいと思わせる魅力が一目で感じられる、ということ。

ウ 書店のどの場所に置いても客に気づいてもらえる存在感を持っている、ということ。

エ 多くの人に読まれるに違いない素晴らしい内容だということが想像できる、ということ。

問6 — 線部⑥「本屋にとって顔です」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 工夫していろいろ変えることができる商品だ、ということ。
- イ どんな本屋なのかを表わす、代表的な商品だ、ということ。
- ウ 最も売り上げを出さないといけない主商品だ、ということ。
- エ 店の最も目立つ所に置かないといけない商品だ、ということ。

問7 — 線部⑦「ポテンシャル」とは、この場合どのような意味ですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 幅広い年代にも合う、高い価値
- イ 人をしみじみとした気持ちにさせる内容
- ウ 他人にどうしても勧めたくなるような魅力
- エ 多くの人々に支持される可能性がある、秘められた力

問8 — 線部⑧「展開しました」とありますが、「展開する」とは具体的にどのようなことですか、説明しなさい。

問9 — 線部⑨「お気をつけて」とありますが、これは具体的にどのようなことを言おうとしているのだと考えられますか。《お気をつけて○○○○○ください。》という形で説明しなさい。

問10 本文中に出てくる「POP^{ポップ}」というのは、書店でよく見かける左の写真のようなものです。小さなカード状のものに印象的な言葉やイラストをかいて商品のそばに掲げ、客の買おうとする気持ちを高めるはたらきをします。このことを踏まえて、あなたの好きな本について「POP」を書きなさい。次の条件に従うこと。

- ・ 解答用紙にある枠の中に収めて書くこと。
- ・ 例に倣^{なま}って、キヤッチコピーを書き、あらすじを二〜四行程度書き、お薦^{すす}めのポイントを書くこと。
- ・ 著者名・書名を、指定の欄に可能な限り正確に書くこと。出版社名も分かれば書くこと。



二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

二人きりになった図書準備室。

ぱん、と軽い音がして、瑞穂^{みずほ}の目の前の机に、一枚の紙が置かれた。

「これ、俳句甲子園のエントリーフォームのコピー」

机の向かい側に座ったトーコが、まだ何も記入されていないその紙をすべらせた。

「……それで？」

「ねえ、とりあえず、座ってくれないかなあ？」

トーコは人懐^{ひとまわり}つこい笑顔で瑞穂を見上げて頼むようにそう言う。

「なんか、ずっと見上げてるのも疲れるし。わざわざ同好会の活動後も残ってもらってるっていうのに、これじゃ私が引きずり回してるような気になっちゃう」

たしかに、あまりに喧嘩^{けんか}腰^{こし}に見えるのもまずいだらう。

瑞穂はトーコに勧められていた椅子に、ゆっくりと腰を下ろした。

「それで、瑞穂、^①折り入^①つての相談^①なんだけど。このエントリーの締め切りが迫っている。定員五名、補欠登録もできるけどね」

「うん。知ってる」

瑞穂も、俳句甲子園のことは自分で調べているのだから。

「それに対して、私たち同好会の会員は六名でしょ」

「うん」

^②瑞穂は用心深く答えて、またエントリーフォームに目を落とす。トーコと視線を合わせなくてもすむように。

「それで、再確認なんだけど、俳句甲子園の大会について説明するね」

「あ、うん」

話はやっぱりこのことか。そろそろ出ると思ってたけど。

要領よく説明してくれるトーコの声にもうわの空で、瑞穂はあれこれ考える。

そう、俳句甲子園は、一チーム五名で参加する。

俳句同好会に入った時から、実際のメンバー編成はどうなるんだろうと不安だった。入会するまでわからなかったけれど、瑞穂が入った時、すでに五名の会員がいたのだ。

——私が入会したいって言わなければ、初期メンバーだけですんなりエントリーできていたんだ。

余計者の瑞穂さえないければ。

自分を余計者とは考えないようにしてきた。瑞穂は、自分で言うのも何だが、国語の成績は学年でもトップクラスだ。国語の文学史の授業を受けている時にクラスメートの反応を窺う^{うかが}だけでも、自分の知識はすごいとわかる。うぬぼれではない。『枕草子』や『徒然草』どころか『源氏物語』だって読んでいる。原文じゃなくて、現代語対訳のだけど。でも、漫画で読んで『源氏』をわかった気になってるクラスメートとは一緒にされたくない。俳句だって、一時期熱中していた。マイ^{注1} 歳時記を持っている高校生なんて、すごく貴重だと思う。

——そうかな。

瑞穂の心の中でもう一人の瑞穂がそうささやく。

——あなたは協調性ないし、作句経験者と言ったって、たいしたキャリアでもないじゃない。その証拠に、今日作った句だって、あんたより初心者の一年生のほうが高評価なくらいだった。

それはともかく、瑞穂みたいに知識のあるメンバーは貴重なはずだ。順当にいけば、二年生三人——瑞穂とトーコと、ここにはいない会長の茜^{あかね}——と、三人の一年生のうちの二人をエントリーメンバーにするのがいい。

だいたい、二年生をさし置いて一年生がメンバーに入るなんて、そんなの……。

——はづれた二年生のメンツが立たないって？ 情けない人間だね、瑞穂。

「……瑞穂？ 続きを話していい？」

「ん？ ああ、ごめんなさい、どうぞ」

自分一人の考えに夢中になっているうちにトーコの説明は終わっていたようだ。

「まだ締め切りには少し時間があるけど、そろそろスタメンは決定した方がいいかなって」

ほら来た。

どうしてここに、会長の茜がないんだろう。

——こういう話って、役つきの会員がそろって説得するものじゃないの？ 落とすメンバーには。

瑞穂の頭の中に、いろんな声が渦ま^{うず}く。

——でも、あんたが落ちるとはまだ決ま^まってないじゃない。

「うちの一年生三人のことなんだけどね」

トーコのきびきびした声で、瑞穂はまた現実^{現実}に引き戻される。

③「私たち、あの三人をA V D担当^{担当}って勝手に呼んでるんだけど」

「A V D？」

「そう。『A』はオーディオ、つまり音声担当。三田村理香^{三田村理香}。声に出した時の言葉の響きにすごく敏感で、センスがあるでしょ」

「そうね」

たとえば今日の練習でも。歳時記をめくりながら、突然理香はこんなことを言い出した。

——ねえ、『神田川祭^{神田川祭}の中を流れけり』って、この句、すごく晴れ晴れしてますよね。それ、ア段の音がいっぱいあるからじゃない

でしょうか。ほら、④十七音の内九音もア段。だからとってもおめでたい感じなんだと思います。

——わかったわかった、理香。わかったから、実作に戻ろう。

トーコは軽くあしらったが、瑞穂には新鮮だった。音で俳句を楽しむなんて。

それを思い出しながら瑞穂は続けた。

「たしかに。それと、理香って声もすごく通って聞きやすい気がする」

「そうだね。あの子いい声してる。さすが、一人カラオケが趣味で、カラオケボックスにマイキーボードを持ち込んで弾き語りするのがストレス解消法って言うだけあるわ」

「ふん」

理香とトーコはそんな話もできているのか。瑞穂は一度も一年生とプライベートな会話ができていないことに、今気づいた。そう言えば、この間ほかの会員がカラオケに行くと言っていたっけ。でも音痴おんちを気にしている瑞穂はことわってしまったのだ。

「マイクの使い方もうまいしね。それがカラオケのおかげっていうのは笑っちゃうけど、大事な能力よね。俳句甲子園では互いに相手校の句を鑑賞して発表するのにマイクを使うから、そこでもたまたましている学校はやっぱパフォーマンス力が欠けると思われやすいもの」

瑞穂は無言でまたうなずいた。認めたくないが、今抱いているこのネガティブな感情は、嫉妬しつとだ。

下級生相手に。瑞穂の気も知らないトーコは、次の話を始めている。

「そして『V』はビジュアル担当ほうじょう北条真名まな。書道何段だったかな、とにかくそっちでも大会に出られるくらいの腕前で、視覚に訴える字面を選別できる」

「うん」

それもよく知っている。

真名は会員の句を毛筆で大きな紙に清書してくれる。それを遠くから見ると、たしかに印象が変わる句があるのだ。いつも自分のパソコンに句を作りためていた瑞穂には、これも新鮮な体験だった。

「そして最後の『D』はディベート担当、桐生夏樹^{きりゆうなつき}。論理を組み立てるのが得意で人の言葉尻にも敏感。悪く言えば揚げ足取りが上手なだけなんだって本人は気にしてるけど」

「ううん、しゃべれるってことはそれだけで俳句甲子園には強いと思う。彼女、この間全校集会でクラス代表としてしゃべってたけど、たしかに全然あがってなかったし」

——俳句甲子園で勝利をおさめるにはどういう戦術がいいか。

新野先生が力説していたことだ。

——ポイントの第一は、鑑賞点をもぎとること。

トーコもあれを思い出していたらしい。

「新野が言っていた通りよね。鑑賞点がものを言う本番で、とにかく話し続けられる人間は強い」

瑞穂はじっとトーコの話聞いていた。トーコの言うとおりだと思うけど、^⑤それにしても。

——私たち、ね。

その中に瑞穂は含まれない。茜会長とトーコは二人だけで、もう全部決めていたわけだ。

「そうだね、トーコ。私もそう思う」

複雑な気持ちを押し隠して、瑞穂は静かにうなずいた。たしかに、一年生三人は強い戦力だ。ここで、私はどうなるのよなんて見苦しくわめくのは、情けなさすぎる。瑞穂にだってプライドがある。

「それと、やっぱりうちの主軸は会長の茜でしょ」

「うん」

これもそのとおりだ。須崎茜^{すさき}は、一見ふわふわしているが、俳句に関してはすごく^{注2}シビアだし熱心だし、実際、王道の俳句を作り続ける。先生の言うポイントの第二、「^{注3}七点の句」を。先週の練習試合でも、今日の俳句でもそうだった。

瑞穂にはそれができない。教科書通りの句を作るなんて、かえって恥ずかしいと思ってしまう。自分にしか作れない、すごくとん

がって、人を驚かすような句でなきや、作る意味がないと思う。

なのに、評価されるのは、『^⑥骨法正しい』と言われる須崎茜の句の方だ。

でも、いい。俳句甲子園の場であって『骨法正しい』俳句は評価が高いんだから、須崎茜をはずすことはできない。

「これで四人。で、最後の一人なんだけど」

もういいよ、トーゴ。

——こんなに丁寧な、外堀をじりじり埋めるみたいにして、^⑦私がいかに知らない人間か説明してくれなくてもよかったよ。そんなこと、もう最初からわかってたから。

一年生三人の能力も、茜会長の才能も、いまさら確認してもらわなかったってわかってた。そして、このトーゴ。

俳句は初心者だと言うし、たしかに句はばつとしないが、夏樹に負けにくいしゃべりは得意だし、頭の回転の速さは夏樹以上。対戦時間の短い俳句甲子園——鑑賞時間は一句につき、たった三分（決勝戦をのぞく）——で、一番鑑賞点獲得に貢献できるのはトーゴに間違いない。

つまり。

——私、井野瑞穂は知らない人間だ。

別に、こういう経験は初めてじゃない。

自分がすごく得意なジャンルだ、みんなに認められてるって思っていたフィールドで、気がつけば誰にも相手にされない ⑧ だったと思知らされるのは。

かまわない。俳句を続けたいって思ったのは、俳句続けてますってアピールしたい人がいるからだ。瑞穂はその人とつながり続けるために俳句をやっているのだ。俳句甲子園なんかどうでもいい。

そう思おうとするそばから、別の自分がささやく。

——どうでもよくはないでしょ。俳句甲子園に出ますって言ったら、きつと応援してくれる、褒めてくれる、そう期待したのも事

実じゃないの。

「……だから瑞穂、お願いね」

「えっ？」

しばらく、トーコの言葉の意味がわからなかった。

それから、目を丸くしてトーコを見る。

「トーコ、今何て？」

「瑞穂、五人目のメンバーになって。実際に試合での順番を決めるのはもう少しあと、実際に句がそろうまで延ばすけど。顧問の意見も聞かないといけないしね」

「ちょっと待って。じゃ、トーコは？」

瑞穂はまだトーコの提案に半信半疑だ。だが、トーコはあっさり答える。

「私は補欠に回る」

「どうして？」

「私は創作ができない人間なの」

「そんなことないよ、みんな初心者なのは一緒じゃない」

⑨ ちよつと心にもない言い方かな。 でも、全くの嘘うそでもない。瑞穂も自信をなくしかけているところだ。

トーコは不思議な笑い方をした。

「酷こくだなあ、瑞穂」

「えっ？」

「瑞穂にはわからないか。世の中には、そういう才能がない人間もいるんだよ」

「俳句を作るのにそんな特別な才能なんて必要かなあ」

長編小説を書くわけではないのに。ところが、トーコの目がきびしくなった。

「できる人間にはわからないのかな。さかあがりができない人間は、自分がどうしてできないのか説明できないでしょ。それと同じだよ。音痴の人間にどうして音をはずしちゃうのよって聞くのは酷じゃない？」

瑞穂が返事を探している間に、トーコはさっさと出て行ってしまった。

(森谷明子 『春や春』〔光文社文庫〕より)

注1 歳時記——俳句の季語を集めて解説し、例句を並べた本。

注2 シビア——厳しい様子。甘いところがない様子。

注3 七点の句——以前、顧問の新野先生が「大会では、作品点が十点満点で七点取れることを目指そう」という意味のことを言ったのを指す。

問1 ——線部①「折り入ったの相談」とは具体的にどのようなことですか。その答えとなる次の文の空欄に当てはまる言葉を、

本文全体を読んだ上で、二十一字以上三十字以内で答えなさい。

瑞穂に、と頼むこと。

問2 — 線部②「瑞穂は用心深く答えて」とありますが、瑞穂の答え方がそのようなになったのはなぜですか。その説明として最も

適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア この後、自分がしたくない内容の話になるだろうと思っただから。

イ この後、どのような話になっていくのか見当がつかなかったから。

ウ 同好会のメンバーに対する自分の気持ちを悟られなくなかったから。

エ トーコの言葉のどこに罨わなが仕掛けられているのか分からなかったから。

問3 — 線部③「私たち」とは、具体的に誰ですか。当てはまる人物を次のア～キの中から二人選び、その記号を答えなさい。

ア 茜 イ 瑞穂 ウ トーコ エ 桐生夏樹 オ 新野先生 カ 北条真名 キ 三田村理香

問4 — 線部④「十七音の内九音もア段」に関連して。次の俳句に「イ段の音」は何音あるか、答えなさい。

桐一葉日当たりながら落ちにけり 高浜虚子たかはまきよし

問5 — 線部⑤「それにしても」とありますが、この後に瑞穂の思いを補うとするならば、どのような言葉を補うのが自然であると考えられますか。前後をよく読んで答えなさい。

問6 — 線部⑥「骨法正しい」とはどのような句のことを言うのですか。前後の文脈から考えて最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 鑑賞する人の五感を刺激する、実験的な句 イ 平凡ではあるが、表現意図がよく分かる句

ウ 先人の有名な表現を使った、安定性のある句 エ 変わったことをしない、基本的に忠実な表現による句

問7 — 線部⑦「私がいかにいらぬ人間か」とありますが、そのような「いらぬ人間」を、瑞穂は自分で何と呼んでいますか。本文の22行目～48行目から漢字三字で答えなさい。

問8 ⑧に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 泣き面に蜂 なみけ イ 井の中の蛙 いなかのかわず ウ 虎の威を借る狐 とらのおいをかざるきつね エ 飛んで火に入る夏の虫

問9 — 線部⑨「ちよつと心にもない言い方かな」とありますが、瑞穂がこのように感じたのはなぜですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 実力差が誰の目にもはつきりと現われる世界なのに、現われているその実力差には目をつぶって綺麗事を言ってしまったから。
- イ トーコに創作が出来ないことは同好会の全員が知っているのに、そのような事実は誰も知らないかのような言い方をしてしまったから。
- ウ 自分は俳句実作の経験者であるという自負を持っているにも拘わらず、自分も含めて皆が同じようなレベルの初心者だと言ってしまったから。
- エ 自分が五人目のメンバーになれるチャンスだからとても嬉しいのに、その気持ちを押し隠してトーコを立てるような言い方をしてしまったから。

三

あとの問いに答えなさい。

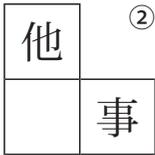
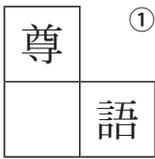
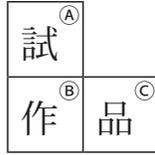
問1 次の①～④の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① この事故では、当方にカシツは認められない。
- ② 説明会には上履きをごジサンください。
- ③ 病気の祖母は、シヨウコウ状態を保っている。
- ④ グラウンドの小石をヒロウ。

問2 例のように、「縦二字」「横二字」「縦横三字」でそれぞれ熟語を作ることができるように、①～③の図の空欄に、それぞれ適切

な漢字一字を当てはめなさい。

例 ① ② 「試作」、③ ④ 「作品」、⑤ ⑥ ⑦ 「試作品」と、それぞれ熟語を作ることができる。



以下余白

